

青山学院女子短期大学同窓会東海支部卒業生 聞き取り調査のまとめ -1952 (昭和27) 年から1965 (昭和40) 年卒まで

趙 慶姫

はじめに

本稿は東海支部の卒業生10名からの聞き取りのまとめになる。東海支部では2021、2022年の両年とも、静岡県部会の取りまとめによる調査を静岡市で行い、その他の地域（愛知、岐阜）の方については名古屋市で行った。

10名の内、静岡市で調査した卒業生4名をA～D、名古屋市で調査した卒業生をE～Jとする。卒業年、学科、在住県は次のとおりである（在住県は調査当時のもの）。

<聞き取り対象者一覧>

	卒業年	学科	在住県
A	1952 (昭和27)	国文	静岡
B	1957 (昭和32)	英文	静岡
C	1964 (昭和39)	英文	静岡
D	1964 (昭和39)	児童教育	静岡
E	1953 (昭和28)	英文	愛知
F	1957 (昭和32)	国文	愛知
G	1957 (昭和32)	家政	愛知
H	1960 (昭和35)	家政	愛知
I	1963 (昭和38)	国文	愛知
J	1965 (昭和40)	家政	岐阜

1. 出身高校と女子の進路選択

どの支部にも共通するが、調査の対象者が支部内の高校を卒業しているケースと、短大卒業後に結婚等により他地域から転入したケースがある。本章では、出身高校が支部内か支部外かでグループに分けて比較してみる。

1) 支部内グループ

出身高校は支部内グループに特徴が見られる。6名の内B (S32卒)、F (S32卒)、D (S39卒) の3名が静岡英和女学院中学校・高等学校を卒業している。青山学院と同じメ

ソジスト系である静岡英和からはB、Fと同期では5人、青短に入学している。キリスト教学校教育同盟加盟校の推薦入試は1958（S33）年から始まっており¹、Dは推薦入試で入学している。Fは青山出身の英和の先生に、Dは英和から青山に進学した教育実習生に、それぞれ憧れを感じたことも青山を選んだ理由と述べている。いずれも四大の卒業生、学生だったが、青山の雰囲気に関心を抱いたということだろう。Fの調査に同席した支部長によると静岡県にはミッション系の中高一貫校が多く、そこから青短への進学者が多いという。

Bによると同期の進学者数は四年制7・8人、短大をあわせて20人近くいたものの、その前後の学年は一桁だったという。B自身、「高校から上の学校に進むことは思っていなかった」と述べている。Fは「進学以外は就職、花嫁修行、洋裁学校といった進路だった。6歳下の妹は県立高校から四年制に進学しているが自分の頃は短大が普通だった」と述べておりFの妹と学年に近いDは、四大に進むつもりだったが、短大に児童教育科ができたので変更したという。英和で同期の親友が東京の音大に進学しているというエピソードからも、Dの頃は四年制進学が増えていたことが窺える。

同じく支部内グループのI（S38卒／豊橋東高等学校）、C（S39卒／磐田南高等学校）、J（S40卒／大垣北高等学校）はそれぞれ共学の県立高校出身で、Dと同様にB、Fの6～8年後であり、「高卒就職は少なく女子は静岡大の教育学部が多かった。同期で青短は3人」（C）、「ほとんど進学で東京が多かった。女子は短大が多く四年制に行くのは教職志望者だった。青短は自分の他にも。父がお嫁に行ったら世間を見る機会がないからと言ってくれた」（J）と変化している。またIは進学組四大コースに入っていたが、2歳上の兄の大学進学が1年遅れたことで、二人が4年間では大変だから、青学に行きたいなら短大にして、シオン寮に入ると良いと父親に言われて、進路変更したと述べている。これらの聞き取りから、私立の中高一貫校、公立高校いずれも昭和30年代前半と後半で女子の進路選択に変化があることがわかる。

2）支部外グループ

支部外グループは東京出身の2名、A（S27卒／青山学院女子高等部）、E（S28卒／小松川高等学校）と、他地域出身の2名、G（S32卒／木曽東高等学校）、H（S35卒／北海道・深川西高等学校）に分かれる。

東京出身のA、Eは青短草創期の入学者である。1期生のAは青山学院の四大に希望する国文科がなかったところに短大ができたので、迷わず短大・国文科を選んだという。戦後教育改革により原則として男性に限られていた大学進学が女性にも開かれ、青山学院にも1946年に女子専門学校が開設された。その後、四年制女子大学開設構想から二年制女子短大に方針転換され1950年の短大開設に至っている²。Aは母方の祖父が学問に熱心で子どもの教育に力をいれていたというが、当時、四大進学を考えていたというのはこういう青山学院の教育環境にあったからこそで、一般には珍しかったのではないだろう

か。一方、東京、大手町に近い気象庁の官舎で育ったEは、戦争の影響で東京と千葉で何度か転校している。女学校5年と新制高校に1年、その後進学を希望しながらも母親の反対でかなわず、1年間の「ストライキ」を経て、2年間であればということで短大英文科に入学している。そのため2期生であるがAとは同年齢である。

進学の高い希望をもち反対する母親を説得したE、国文を学びたいという理由で四大ではなく短大を選んだA。戦後まもない時期、進学はもちろんのこと、何を学ぶかについても明確な意志をもっていた二人の話を聞いたことは貴重だった。女性が高等教育を受けることが可能になった時代に、その受け皿として青短が誕生したことの意味をあらためて実感する機会になった。

この二人の4・5年後に入学したG（S32卒）は、林野庁に勤める父親の転勤により6回ほど転校を経験している。高校は自然豊かな木曽谷にあり、1学年150人中進学は5～6人、就職が当たり前で、G自身、卒業したら銀行にでもと思っていたという。父親が東京出身で、「自分はテニスばかりでゴボウのように真っ黒だったため、少し垢抜けるよう東京に行くのが良いと父に言われた。父が学生時代、渋谷に下宿していて青山の学生の雰囲気を見ていたことから青山にとまった」と述べている。

一方、北海道出身のH（S35卒）は「1学年250人のうち、女性の進学はわずか、進学の場合もほとんどが短大だった、女子が東京にということは考えられず、自分は大学に行きたいと思っていたが札幌ぐらいだろうと思っていた」と述べている。両親が娘を東京に進学させたいと考え、仕事の関係でよく上京していた父親が東京の知人に相談し、青短を勧められたという。妹二人も青山に進学している（一人は短大、もう一人は四大）。

二人に共通するのは本人が大学や東京への進学を考えていなかったのに対して、親の思い、東京との関わりがあって青短に入学しているという点だろう。他の支部の調査でも明らかだが、東京に出ること自体は親が勧めたり賛成するものの、2年であればという条件付きであることがほとんどである。また兄弟姉妹の人数が多かった当時、兄や弟は四年制だが女子は短大とされたり、本人も家庭の経済状況を慮ってそれを自覚するという話を聞くことが多かった。

2. 学科の選択

学科の選択は親の勧めまたはその他の理由というケース（G、H、J）と、本人の希望によるケース（A、B、C、D、E、F、I）に分かれる。年代による違いはなく、前者のケースの3名はいずれも家政科で、東京への進学自体が親の意思によるという特徴がある。また出身は大垣、木曽、北海道深川である。後者のケースの出身が東京、静岡、豊橋であることから地域差もあったと考えられる。

1) 親の勧めまたはその他の理由によるケース

G (S32卒) の母親が「結婚して家庭に入るのには家政科がいい」と言ったように、当時、家政科への入学者の多くは親の考え・勧めがあり、それに従ったと考えられる。家政科イコール料理や裁縫というイメージが親の世代にあったことがよくわかる。しかし青短の家政科には化学や物理といった授業があり、J (S40卒) はそれらが苦手であることを実家でこぼしていたところ、母親から落第した夢を見たと言われたというエピソードを紹介している。

またH (S35卒) は「英語が好きで英文科も受験したが、田舎で外国人を見たことがなかったため、試験の時、ネイティブの先生が前に立ったら頭が真っ白になって気がついたら試験が終わっていた。数学も好きだったので家政科を受験した。自分の失敗を糧に妹二人は英文科に入学した」と語っており、数学を得意とする受験生が家政科を選択したという傾向もあった。一方、Gは「英語もやってみたかったが東京に比べて遅れているのではと自信がない面もあった」と述べていることから、地域差が影響したともいえる。Gが家政科受験のため、高3の夏休みに帰省中の京大生から数学の指導を受けたのも、数学という科目自体に対する不安とともに東京との差を意識したのかもしれない。

2) 本人の希望によるケース

本人の希望によるケースのうち国文科は3名いる。F (S32卒) は「英和ではカナダからの宣教師がいて、英語教育には力をいれて英会話の時間も多かったので大学では古典を学びたいと思った(読書が趣味だった)、短大は国文科に行こうと友達と相談した」と述べている。当時、中高に外国人教員がいたのはミッション系の私立ならではだろうが、北海道深川の出身であるHの入試の失敗エピソードと対照的である。A (S27卒) は10歳で長唄、三味線を始め、歌舞伎への関心が国文科を選んだ理由であった。もう1名のI (S38卒) は、「高2の担任が志賀直哉に傾倒していて自分も本を読むのが好きだった、青短には素晴らしい先生がいると聞いていた」ことが選択理由だったという。

英文科も3名で、東京出身、13歳で終戦を迎えたE (S28卒) は、「当時、世の中のあらゆるところが英語、英語になった。これからは英語を知らなければ。英語を勉強したい」と英文科選択の理由を述べている。B (S32卒) は前述のとおり当初進学を考えていなかったが、高2の終わり頃、スチュワーデスに憧れて急に英語の勉強を始め、英文科だったら青山と考えた。C (S39卒) は「英語が好きだった」という理由であるが、英文科のB、C、Eには、卒業後に英語教育など語学に関わる活動をしているという共通点がある。これについては第9節で述べる。

児童教育科が開設されたのは開学後12年経った1962 (S37) 年であったこともあり、本稿10名の内では、D (S39卒) 1名のみである。前述のとおり、幼児教育に関心をもっていったところちょうど児童教育科ができたということを知って短大に進路を変更した。「短大だがいいかと(英和の)先生に確認されたが、嬉しかった」と述べている。

ちなみに教養科が開設されたのは1966（S41）年であり、今回のプロジェクトの対象に教養科の卒業生は含まれない。東海支部の対象者の学科別人数が3・3・3・1名だったのは、開設年を考えると偶然だったがバランスが取れていたことになる。

3. 家族関係の影響

1) 親の希望・選択

他の支部も同様だが、この時代は進路決定に家族関係が影響していることが多い。短大以前の中高選択でも、青山学院女子高等部出身のAが「母親が青山学院に入学を許可されて、入学するばかりになっていたのに、当時、父親の転勤で止むなく鹿児島第一高女に入学した。そこで子どもにはぜひ青山学院に入れたいとの希望があったので、当然のごとく青山に入り、高等部、さらに短大へと進学し、短大1期卒となった。妹も女子高等部」と語っている。B（S32卒）は4人姉妹が全て静岡英和で、親が子どもに自由にさせてくれたという。同じ静岡英和に清水市から通ったF（S32卒）は、「新制中学ができたばかりで公立中学内が落ち着かなく、父が情操教育のために5人きょうだいのうち兄と私を静岡に出した。私の下は6歳離れており、公立中学も軌道にのり落ち着いてきたので3人の弟・妹は公立中学、県立高校、四年制大学に進んだ。5人きょうだいのうち短大は私だけ」と述べている。D（S39卒）の父親は「明治の最後の人だがとてもモダン、自分にはキリスト教の教育はできないので、娘をミッション系に入れたいと考えて雙葉にと言っていた」が、Dは校風の違いから自分で英和を志望したという。

東京の大学に入れたいという両親の希望があったH（S35卒）は「母親が6人姉弟の長女で母親代わりとして育ち、弟たちは医学部や法学部に進学したのに自分は小学校だけだった悲しみから、子どもには男女平等に教育を受けさせたいという思いを持っていた。父親も高等教育を受けていない」と語っている。自分が受けられなかった教育を子どもにはという親の強い思いが、北海道の内陸部から娘を東京に送り出す力となっている。それに応えた娘の学生生活、卒業後の進路についてはまた後で紹介する。

一方、親が東京出身で娘を東京に出すことに抵抗がなかったり、東京に出ることを勧めたというケースの内、Fは両親とも東京出身で母親が当時珍しく共立女子大専門学校（当時）を卒業している。I（S38卒）は「東京で生まれ父親の郷里の豊橋に疎開。父は戦後、東京に帰るつもりだったが、妹が二人生まれたり、自分（I）が肺炎になって、当時日本で使用されるようになったばかりのペニシリンにお金を使ったなどの理由で帰れなかった」と語っている。G（S32卒）は前述の通り東京出身の父親が青短を選んでいる。またGは母親から「クリスチャンスクールだから、人生で何かあったとき拠り所になる、宗教的な雰囲気のところはいいのでは、と夫婦で話した」と聞いている。

母親に進学を反対されたケースはE（S28卒）のみで、父親の反対があったとは聞いていない。母親に女性の生き方に対する規範意識が強かったのは、おそらく自らが幸せて

あったことから、その規範の中で生きることが娘の幸せになると考えてのことかもしれない。

2) きょうだい関係の影響

長女であることが進路選択に影響したのはC (S39卒) で「父から四年制なら静岡大、東京に出るなら短大と言われ、東京に憧れもあり、妹弟のことを考えて短大に」と述べている。一方、「兄が就職して東京にいたので出してくれた」というJ (S40卒) や東工大生の兄がいたFのように男兄弟の存在が東京行きのハードルを下げたケースがある。またIが兄によって進路を変えることになったのは前述の通りである。「兄がまさかの浪人、1年ずれて寮に入るようになったため計画が狂った父が青短を勧めた。担任に相談したら青短ならいいのでは言われ、父も大変だと思ったので決めた」と語っている。

3) 親の職業

父親の学歴・職業としては、他支部で医者が多いという報告もあったが、本稿の10名の内、確認した中にはいなかった。代わりに国家公務員が多いといえるだろう。Eの父親は一高、東大から気象庁、Gの父親は東大から林野庁、Fの父親は「水産大を卒業。役人だったが缶詰会社を起業した、水産庁だったと思う」とのことである。Jの父親は勤め人だったとのことだが、B、Hは経営者である。進路選択の理由には家庭の経済状況を慮ったという発言もあったが、いずれにしても2年間とはいえ、地方から東京の私立に送り出すことができるのは一定以上の経済レベルであったことは間違いない。

4. 卒業後の進路

1) 自宅暮らしの場合

卒業後の進路は出身が東京と地方で違いがみられる。昭和20年代卒業の東京の2名は「女子が勤めるのは世の中の親にとってさほど重要なことではなかった時代」A (S27卒)、「あの頃、親の世代にとっては結婚前の女性が働くということは考えられなかった。でも時代は変わった。自分も社会の一員、選挙権もあるし、社会を見たい」E (S28卒) と、働きたいという思いを持って行動に移している。Aは「国立国語研究所 (方言学の研究所) に勤めたいと思い、両親は反対したので黙って願書を出したが、運悪く自分の留守中に書類が届いて試験を受けることができなかった」と実現しなかったが、その後、長年にわたって三味線を教える仕事をしている。Eは「母親に1年間だけ働きたいと許可をもらって三菱銀行の本店審査部に就職。日銀と三菱に父の一高時代の友人がいてどちらがいいか尋ねられ、丸の内がいいと言って三菱に。当時は就職が難しい時代でコネがないと就職できないと言われていた」と語っている。

当時 (その後もかなり最近までその傾向はあったが)、女子の採用は自宅か親族宅通勤

が条件だった。G (S32卒) は父親が林野庁に戻り2年次から自宅暮らしだったことから、当時、青短からは毎年数人入社していたという和光に就職している。「何かしなくちゃと思って周囲より遅かったが求人の掲示を見に行った。ソニーのトランジスタラジオが出た頃でよく売れて面白かった」が、「通勤1時間以内ということで辞めるはめになり、勤めたのは10ヶ月くらい。『お嫁に行くことになったら辞めていただきます』という具合だった」と語っている。せっかく就職できたものの、やはり女性が働き続けるのは難しい時代だった。

2) 地方出身者が出身地以外で就職したケース

I (S38卒) も自宅通勤の条件に阻まれていたが、豊橋に戻りたくないと思っていたところ、住宅提供という求人があって応募した。「日清紡績の工場で働く女性のための通信制高校の教師職で、教職はとっていなかったが大阪で研修を受け、四大卒に混じって20歳で高校生に国語を教えた」そうで、勤務地は名古屋だった。教職をとっていなかったのは「先生になりたくないと思っていた」からだったが、「地方出身の生徒の親が様子を知りたいというので出張して親と話したり、地方から出てきて働きながら学んでいる生徒たちが素晴らしい、私はずっとこれで生きたい、と青山の時の先生に書き送った」というくらい、この仕事に熱心に取り組んだ。余談だが、この手紙に心配した先生が紹介した相手とその後結婚している。

もう一人、自宅通勤条件の壁を打ち破ったのはH (S35卒) である。「東京に残りたかったが2年で帰された。ゼミの大西(セチ)先生に東京で働きたいと伝えていたら、半年後に短大職員の空きが出て声がかかった」とのこと。人柄はもちろんのこと、学生時代、「2年間出してもらうのに親が大変だったのはわかっているので真面目に一生懸命勉強した」ことが評価されていたのだろう。「自宅通勤の人と変わらずできるか確認され、できますと答えたが学生時代と同じだけ仕送りがないとやれなかった。両親も学校ならいいと言って東京に出してくれたが、母親に四年制大学と同じくらいかかったと言われた」と語っている。学生部に勤務し、「加藤楸邨先生、荒牧(鉄雄)先生、西島(正)先生らが事務所によく来てくださり、荒牧先生、西島先生はご自宅にも呼んでくださった。当時、職員は短大の卒業生のみで、その後、男性も入った」という。退職後も職員同士の集まりが続いたということからも、当時の事務室のアットホームな雰囲気が窺われる。

またHは教職をとっているがその理由について、「田舎に帰ったら、先生ができれば楽しいと思って、授業が多くて大変だったがとった。田舎には他に仕事がありませんでした」と述べている。当時の進学組に教育学部が多かった理由は、地方では女性の職業の選択が限られていたことだったが、青短でも教職課程履修の理由となっている。ちなみにHの妹は青短卒業後、札幌で就職したのち、シオン寮の飯久保澄寮監から声がかかり寮監補佐として勤めたそうである。

3) 地方出身者が地元で就職したケース

地元に戻って就職したのはB (S32卒) で、スチュワーデスに憧れて英文科に入学したものの、当時、筆記試験に数学があり難しくて受からず、もう一つの志望だったアナウンサーになるべく静岡放送に入社している。「入社2年目、静岡放送がNHKに次いでテレビ放送を始め、天気予報を最初に担当した」と述べている。D (S39卒) は「東京の幼稚園に勤めることになっていたところ、静岡に帰って音楽教室に応募するという同級生の話を聞いた途端に帰りたいくなり、自分もその音楽教室に就職することに。第二次ベビーブームで次々と音楽教室ができていた時代、子どもに手解きをする仕事だった」とのこと。しかし「その夏に日本文化交流会の企画による50日間のヨーロッパユースラリーに参加したいということになり、就職先に辞退を申し出たところ、とても良い企画に参加されるので帰ったらまた来てくださいと言われた。そういう時代だった」と語っている。

C (S39卒) もやはり東京で就職しなかったものの、自宅通勤条件のため地元で就職することになった。「情報がない時代で大変だった。冬休み帰省時、高校の進路指導の先生から浜松の塗装会社を紹介されて、社長秘書として採用された」という。「当時、就職は半分くらいだったか。同じ高校からの青短卒業生は袋井の中学で英語の先生になった。東京の人はスチュワーデスや商社が多かった」と述べている。

4) 仕事に就かない選択・就く選択

就職しなかったのはF (S32卒) とJ (S40卒) の2名である。Fは清水市に戻り、兄は東京で就職していたが、下に3人(姉弟)いたので家の手伝いをしながら、料理、洋裁、和裁、お花、お茶を習ったという。Jは明治生まれの父親が「女の子が稼いで男の人を馬鹿にするようになってはいけないという古い考えで、就職してはいけないと言われた」そう、大垣に戻ってやはりお茶やお花を習ったと述べている。学生時代のアルバイト先で就職という話もあったが、部屋を借りて生活するのは不十分な給料の額だった、地方から来た人は帰って洋裁学校や料理学校に行く人が多かったという。

このJが昭和40年卒で、本稿の調査対象の中で最も若い世代であることを考えると、昭和27年卒の1期生から10数年、女性の進路に対する社会の意識はあまり大きく変化していないといえるだろうか。その中でも10名中8名が、結婚のためにすぐ退職するなど短期間のケースが多かったとはいえ、何らかの形で仕事に就くという進路を選んでいる。東海支部という、比較的東京に近い支部の特徴もあるのかもしれないが、やはり一人一人の「何かをしたい」「社会を知りたい」という思いの強さがこの数字に表れているのではないだろうか。

5. 授業・行事

授業と行事については、印象に残っていることを学科別に紹介する。調査では、つい先

日のことのように授業や先生の思い出を楽しそうに話す姿が見られた。また複数名の調査を同時間、同会場で行ったので、他の卒業生の話から思い出して後で追加されるといったケースもあった。互いの話に触発されたり補足し合う、共感が発話を促すという効果は、長い時間順番を待たせることは対象者の負担になるかという懸念もあったが、この聞き取り方法のメリットといえるだろう。

1) 国文科

A (S27卒): 漢和辞典をつくった漢文の大家・諸橋轍次先生など有名な先生がいらした
が当時は知らず、後で驚いた。

F (S32卒): 担任が加藤楸邨先生、温かい人柄で俳句が好きになった。諸橋轍次先生が
授業を受け持ってくださいと、目が悪かったので歩きながらポンと肩を叩いて指名され
るためみんないつ叩かれるかと……、思い出に残っている。

I (S38卒): 授業は本当に全部良く楽しかった。川瀬一馬先生の花伝書の授業は素晴ら
しかった。馬越(宮)先生の源氏のゼミで卒業論文は「柏木の巻」。夏休み、豊橋で図
書館に通いつめた。先生から「あなたたちは論文を書いても本当に学問の入り口の入り
口、学者になれとは言わないがもし学問する人と結婚したら手助けできるよ」と言われ
たことが、その後に学者との結婚を決心させた。

入学してすぐ「奥の細道研究旅行」(北陸の巻と東北の巻)があり、私たちは北陸だっ
た。作文のクラスがあって発表したり、書道も素晴らしい先生がいた。2年間にしては
本当に色々なことを学んだ。

2) 英文科

E (S28卒): クラス担任は荒牧先生。後半は後に四大の学長になられた保坂栄一先生(西
洋史)。英文講読でオスカー・ワイルドがレディング監獄で書いた*De Profundis* (『獄中
記』)が印象的だった。当時、individualism 個人主義について考えをめぐらせた。今で
も時に手に取る本。英文専攻は卒業論文がなかったが、夏休みに1冊読んでレポートを
書くようにと言われた。

B (S32卒): 菊地(裕)先生のフレンチレヴューション、6人ぐらいしか受講者がいなく
て身近に先生を感じた。時事英語の松宮(薫子)先生の授業のために、前日、渋谷の駅まで
駆け降りて英字新聞を購入して勉強した。西島先生によるD・H・ロレンスの*Sons and Lovers*
をよく覚えている。高校で英語をちょっと勉強したくらいでは長編小説を読むのは難し
かったが、短大ではこんなことも学べるのだと、それだけで楽しくて、勉強させていた
だいた。

B (S32卒)・C (S39卒): 英文科だが教養科目として履修した川瀬一馬先生の花伝書の
授業の印象が強い。

C (S39卒): 町野(静雄)先生の英語講読、アメリカから来られたサッチャー(Thacher

Juliana) 先生、松宮先生、菊地先生が印象に残っている。

3) 家政科

G (S32卒): 調理実習は楽しみだった。西洋料理の大西先生。台所の手伝いもしたことがなかったので珍しかった。料理の基礎を教えてもらった。

H (S35卒): 大西先生の西洋料理のゼミで、先生とは親しくさせていただいた。修学旅行のようなもの(学科の旅行ではなく)があり、九州、熊本、長崎、四国など全部参加した。一番の思い出は学長の向坊(長英)先生と富士登山をしたこと。バス1~2台で。5合目、8合目で宿泊。ご来光を見ながらみんなで讃美歌を歌ったことは忘れられない。

教職もとして母校で教育実習を行った。当時、家政科は保健体育の教職もとれた。保健の授業は放課後だった。教職をとったのはほんのわずかで10人もいたか。

J (S40卒): 和裁、西洋料理の大西先生、中華料理、阿部(幸子)先生の化学は洗剤、繊維について。島崎(通夫)先生、深谷(浩)先生。住居学もあった。授業がびっしりで忙しかった。秋に3泊4日の東北旅行に参加し、自分では行かなかったが夏には北海道旅行も。春に9泊10日ぐらいで九州を一周したのも楽しかった。

勉強を究めるといふより教養を身につけるといふものだった。体育の多和(はる)先生が「選手になったり記録が伸びるわけじゃない、結婚してご主人と楽しめるテニス、ボウリングとかスキーとか、そういうのをやりましょう」とおっしゃって、一生楽しめるなと思った。

4) 児童教育科

D (S39卒): ここはすぐに役立つ教育はしません、幼児の時から本物を学ばせる、教えることが大切と教わった。幸田(三郎)学長がすごく力を入れて、一流の先生を集めましたとおっしゃって、見るのも聞くのも、嬉しかった。児童文学の講師、瀬田貞二先生のお宅に押しかけたが歓迎してくださった。「自然」の柳宗民先生は素晴らしい先生だった。美術の掛井五郎先生は静岡教会との関係もあり、ザックバランで「先生だから」という隔てがなかった。音楽の高橋好子先生のゼミメンバーでうちにもお邪魔した。1期生だったからか、そういう思い出があって忘れられない。

6. 授業外の活動・経験

本節も個々の発言を紹介する。演劇鑑賞、オラトリオソサエティやギター、山登りなど、学生時代の経験が、卒業後の生涯学習、趣味、教会活動などにつながっているケースも多い。授業で忙しい2年間であったが、課外でも時間を惜しんで生き生きと活動し、また時には自己沈潜ともいえるような時間もあった。新劇観劇、学生企画のダンスパーティなど、当時の流行が窺い知れるもの、また地方出身者ならではの「デパートハイキング」といっ

た言葉も登場し興味深く話を伺った。

1) クラブ活動・課外活動

- A (S27卒): 歌舞伎研究会に入っていて、英語の授業がお休みと聞くと学校の前から都電に乗って歌舞伎座まで一幕見によく出かけた。あるとき帰ってきたら休講ではなく先生に怒られ、英語は一生懸命やっていたのにその学期は評価がAからCに下がってしまった。学校の思い出はいろいろあるが、歌舞伎のことがいちばんの思い出。
- B (S32卒): 英和の中学3年間バスケット部だったが、短大に入って勧誘を受けバスケット部に。短大は部員が3人しかいなくて大学と一緒に活動し、関東女子大学リーグで3位になったことも。慶応と3位決定戦をやって、新聞のスポーツ欄に自分の名前と得点数が載ったと知り急いで買いに行った。体育館はないので、都電で神保町の岸体育館に通っていた。
- I (S38卒): オラトリオソサエティに入って楽しかった。追分寮の修養会も大好きだった。聖書の話もあったがメディテーションとか夢のような時間だった。結構参加人数がいた。
- C (S39卒): E S Sに入って、真鶴で合宿した。
- D (S39卒): 姉も妹も青短という友人から、お姉さんが入っていらしたオラトリオソサエティに誘われた。英和ではハレルヤコーラスぐらいは歌ったが、「メサイヤ」の全曲は歌っていなかったなので、嬉しかった。
- J (S40卒): 四大と一緒にギターマンドリン部に参加し、厚生年金会館でコンサートも。2〜3泊の合宿が夏は千葉の海、冬は箱根であり楽しかった。寮に入れず国立の父の親戚の家から通っていたが、ギターを持ってラッシュの中央線に乗るのが大変で、学生部で探した祐天寺の下宿に引っ越した。

2) 余暇・趣味

- E (S28卒): 通学の都電が神保町で乗り換えだったので、本屋街は散歩エリアだった。新劇が盛んな頃で劇団民藝が一橋講堂を使っていたのでよく観た。
- F (S32卒): Gと一緒にデパートハイキング。Gが2年目に寮を出て一緒に行動しなくなってから、別の寮の友人とダンスを習うようになった。寮内ではダンスを習うのが流行していた。
- G (S32卒): デパートが嬉しくて東横百貨店によく行った。日曜日、礼拝に出て、寮のお弁当は部屋で食べて、渋谷あたりでぶらぶらして帰るのが関の山。他の人はダンスパーティに行っていたが自分は行かなかった。
- H (S35卒): 寮の友達、他大学の男子学生と一緒に山登りもした。
- I (S38卒): 歌舞伎、文楽も観に行った。休講の時は渋谷の映画館(文化会館)にすっ飛んで行った。

C (S39卒): 休講時、友人と青山墓地で散歩したり。休日、渋谷駅の別々の改札口で待っていて会えないことがあった。

J (S40卒): ダンスパーティに参加、そんな時じゃないとプリンスホテルに行けないので。人気バンドの演奏があった。

7. 寮生活

女子が地方から東京に進学するのにあたり、寮の存在は大きい。寮があるというのが、両親が青短を選んだ理由と述べたG (S32卒) のように、多くの場合、親にとって大学選択の条件になる。本稿の対象者の内、東京出身の2名を除く8名中、5名がシオン寮(金王寮)に入寮している。それ以外の3名は、入寮を希望しながら「当時は住宅難で申し込みに行った時はもう入れなかった」J (S40卒)、「寮はクリスチャン系の高校から入ると思い込んでいたため、父親が下宿を決めた」C (S39卒)、「(推薦入試で寮に入れたのに) 母親が6時の門限では自分が行っても一緒に食事もできないと言って、知人のお宅に下宿した」D (S39卒) という理由である。I が「合格して一緒に寮を見に行った兄から、規律が厳しく修道院みたいなところと言われた」と語っている。D のように厳しい規則に躊躇する家庭もあったのだろう。また「寮に入るのは入学するより大変だった」H (S35卒) というように、寮が人気で入れなかったという話は他の支部の調査でも何度か聞いた。

1) 寮監の思い出、教員との関わり

「特に記憶に残っていること」という質問に寮の思い出を話すケースが多かったのは、親元を離れて共同生活を送るという経験が、18歳の多感な女子学生にとって、やはり相当強烈な印象を与えたということを表しているのだろう。

その中でも、何と言っても母親代わりとなる寮監の思い出が強く残っているようで、感謝する言葉が多く聞かれた。教育寮であったことから教師の役割も担う寮監は時に厳しく、しかし優しく学生たちを見守った。「自分は第一寮(金王町)で川尻(知恵)先生。すごく影響を受けた。素晴らしい先生で親は安心してた」B (S32卒)、「寮の先生が立派な方で飯久保先生がよかった。尊敬していた。そういう先生、仲間に触れられたのが一番よかった」G (S32卒)、「学校は勉強の場だが寮は家庭的な雰囲気。飯久保先生が特に気を配られていたのかも。両親が訪ねてくると歓迎してくれた。具合が悪くなった友人のお母さんが看病で1週間泊まった時も、先生が食事を出してくださって家庭的に面倒を見てくれた」F (S32卒)、「寮の友達と他の大学の男の子達もグループになって山登りに行ったが、飯久保先生も『ダメ』とはおっしゃらなかった。『明日、どここの山に行きます』と全部先生に報告した」H (S35卒) といった思い出が語られた。

夕拝や行事では先生方とも近く接する。短大の教員がしっかりと関わったことが学生に及ぼした影響も大きい。「夕拝で讃美歌、心に残っている」G (S32卒)、「毎週、学長先

生（向坊先生）、学生部長先生（西島先生、荒牧先生）がいらしてお話ししてくださった。毎日夕食の後にお祈りがあった」H（S35卒）、「夕拝があって、毎週先生方がお話に来てくださった」I（S38卒）、「クリスマス会の招待状を向坊先生の学長室に届けたのが良い思い出」B（S32卒）、「寮は色々な行事（クリスマス、イースター）をみんなで力を合わせて、劇の練習をしたり楽しかった」I（S38卒）。

2) 門限にまつわるエピソード

寮の門限は当初6時だった。「高校ではテニスで県大会まで出たが、短大ではしなかった。時間的に短く寮の門限も6時だったし、友達と交わるだけで嬉しくて」G（S32卒）、「門限が6時だったのでダンスを習いにはよく行ったが、実際のパーティには2・3回しか行かなかった」F（S32卒）、「青短の近くに手芸学校があって通いたかったが6時の門限を守れずダメだった」H（S35卒）が、I（S38卒）の時は門限が7時になっている。

門限は厳しく、「母から寮の先生は大変、迷惑をかけないようにと言われていたので門限は守った」G（S32卒）が、中には、「飯久保先生の部屋が1号室。2号室の方で、遅れて帰って来て窓から入ろうとして間違えて先生の部屋を開けちゃったという寮生がいた」F（S32卒）、「夜、寮監の飯久保先生が部屋を回って『みなさんお揃いですか』とドアをノックした。中には遅くなって、外の垣根を越えて帰寮という人もいて、揃っていると嘘をつくのが辛かった。ドアを開けられることはなくありがたかった」H（S35卒）といった、おもわず笑ってしまう話も出た。

3) 生活の思い出

「食事も美味しかった」I（S38卒）し、お昼のお弁当も出ていた。「寮はお弁当が出た。田舎では肉なんか食べなかったが、トンカツとか出て、体が弱かったのがすっかり太ってしまった」H（S35卒）。しかし「1年までお弁当があったが、みんなで、学食で食事がしたいと運動をしてお弁当をやめてもらった」I（S38卒）とのこと。学生の要望によって短大に学食（学生ホール）ができたのはIが入学する1年前、1960（S35）年である³。Iは「私の学年は割合そういう（学校に対して主張する）人がいた」と述べており、当時の学生気質を感じさせる興味深いエピソードである。

掃除当番や洗濯など、自宅を出て初めて経験することも多かった。「寮の部屋ごと、聖書（聖句）を読んで、讃美歌を歌う当番があった」F（S32卒）、「お掃除はすごく大変だった。実家にいるときは自分でそんなに掃除することはなかったのに、朝起きるなり窓から廊下から全部。部屋の火鉢の炭をもらいに行った」I（S38卒）、「洗濯板で洗濯して屋上に干した。東横線のプラットホームが下の方に見えて、都会に来たんだと感慨深かった。天気の良いと富士山が見えて、向こうがふるさとなんだと思った」B（S32卒）、「洗濯は順番待ちになってしまうので朝4時台に起きて洗濯した。寒いのは慣れているので」H（S35卒）といった思い出も語られた。

4) 寮の意義の大きさ

「本当の親友は寮の仲間」 I (S38卒)、「寮の暮らしは時間が厳しかったが自由だった。楽しかった。気ままに育ったので4人の生活で我慢しなくてはということを学んだ。与えられた仕事(掃除当番、配膳)もあったが」 F (S32卒) というように、地方出身者にとって寮監との、また寮生どうしの交わりがどれだけ彼らの人格形成に影響を及ぼしたか計り知れない。

東京出身のE (S28卒) が「入学して自身に変化があったか」という質問に対して「影響あったと思うが、(同席していたIから「地方から出てきた人とは違う?」という問いかけがあり) 寮の話聞いていて普通の生活と随分違う、寮生活じゃないと……」と答えている。本調査で、寮の話になると対象者の熱量が一気に上がることを度々経験した。もちろん卒業生全体に対する寮経験者の割合を考えれば一部であるとはいえ、短大の教育を振り返るにあたって、やはり寮の意義の大きさを重視する必要があるだろう。

8. キリシト教

10名中、青山学院と静岡英和あわせて4名がミッションスクール出身である。B (S32卒) は中3で洗礼を受けており、一緒に英和から青山に入学した5名はFも含め、皆、入学時には洗礼を受けていた。D (S39卒) は結婚後、家業の薬局を任されて忙しさで教会から離れていたが、学生の時オラトリオソサエティで活動していたことから、聖歌隊への参加をきっかけに55歳で教会に戻ったという。一方、青山学院女子高等部出身のA (S27卒) が小さい頃から日曜学校に通っていたのは「母親がそういうところに子どもを行かせるのが良いと思っていた」ためでクリスチャンホームではなかった。しかし、「中学に入って母親と一緒に教会に通った。弟は初等部から暁星に通い、カトリック信者」というように、キリシト教に近い家庭環境だった。それでも青短に入学して変化があり、「高校まではそう感じなかったが、短大に2年いた中で人様に親切にする、困った方は助けなければという精神を授けられた」という。洗礼を受けていて、「キリシト教を学んで、自分本位に考えていたことが、相手の気持ちを考えられるようになったかなと思う」と語っている。

I (S38卒) の母親もキリシト教に関心があったものの「やはりあの当時はなかなかね」というようにクリスチャンになるところまではいかなかった。Iは小学生の間、日曜学校に通っていたが、中高では離れていたため短大に入学して讃美歌を歌ったりすることがとても嬉しかったという。「高校時代は本の読みすぎで虚無的、暗い性格、生意気だったが、ミッションスクールから来た方たちがみなさん天真爛漫で、田舎の公立高校にはいないタイプ。自分もすぐに馴染んで、性格が明るくなり、高校の同級生にびっくりされた」と語っている。「青短に入って価値観、生き方も変わった。パッと燃えて受洗するタイプではなかった。受洗できたら(委ねてしまえば) 楽だろうなと思ったが、うちは仏教だし」と当時はそこでとどまったが、今は教会の活動に熱心に参加し2021年に受洗をしたという。

第3節で記したようにクリスチャンスクールが人生の依り所になるのではと両親が話し合ったG（S32卒）は、「入学して変化は」という問いに対して、「礼拝が大きな変化。聖書に初めて触れ、讃美歌は良いなあと。キリスト教が底流にある」と答えている。H（S35卒）は「礼拝も毎日10時からP S 講堂であったが休んだことはない。ボロボロの讃美歌集が証拠」といって持参した讃美歌集を見せてくれた。C（S39卒）は「(入学までは)キリスト教に縁のない生活だったが毎日礼拝に参加、讃美歌に触れて、話を聞くのが楽しみだった。自分で感じたものが大きかった」と語っている。礼拝欠席者が多くなり、義務化された礼拝行事「アッセンブリー・アワー（A・H）」が設けられたのは1958（S33）年だが、学生に不評で1962年の『短大新聞』には「腐敗したアッセンブリーアワー」という論説が載り、A・Hは1963（S38）年4月に廃止されている⁴。当時のそういう状況からすると義務ではなかった礼拝に毎日参加した二人は少数派だったのかもしれない。しかし、Cは「義務ではなかったがかなりみんな行った」と述べている。G、H、Iのように寮生活でキリスト教に接する学生は多かったと思われるが、寮生ではなくともキリスト教に基づく教育の影響を受けたCのような学生もいたということを知る機会になった。

9. 卒業後の社会活動・ボランティア・生涯学習

短大同窓会が卒業生の交流に加えて「生涯教育」「ボランティア」を活動の柱にして発足していることから、本研究ではこの点に関して調査している。卒業後、結婚によって一旦途絶えた学びが、子育てを終えてから復活した親の介護で中断するなど、女性の生涯学習はライフサイクルに左右される。結婚による環境の変化も女性の方が大きい、それによってさまざまな出会いが生まれる。きっかけが受動的な要因であってもそれを能動的に生かしている。

卒業年の順に紹介していく。若い時から継続している趣味もあれば、50・60という年齢になって始めた新たな学びもある。持ち続けてきた関心や思いを何十年も経って実現させている者もいる。習得したことが仕事にもなり、同時にそれを生かしたボランティア活動も行ない、またそこから新しい学びが始まるといった学びの循環が発生しているケースもある。同窓会活動の一環や教会活動でボランティアを継続している者もいる。いずれも何歳になっても何かをしたいという気持ちを持ち続けていることに心から感服する。

A（S27卒）：三味線教室を2、3もって教えていた。初めは長唄だったが、結婚して静岡に来てからは、民謡が盛んなので人を楽しませるのには民謡が良いと思って習い、資格も取った。デイサービスで地方の民謡を演奏して喜ばれた。介護施設を1週間に1回か2回、お弟子さんたちとまわったり、民謡の教室を作ったりして奉仕してきた（コロナ禍のため中断）。太鼓、日本舞踊も習った。芸能が好き。三味線のために人生の半分が終わったようなもの。

E (S28卒): 実用としての英語を話せるようになりたかった。(結婚後) 当時、名古屋にアメリカ人がかなり住んでいたの、5人ぐらい集まって英会話を教えてもらった。夫の仕事で1年間、イギリスに。1984年から日本語セミナーで学び、日本語教師として1987年から5年間、県のプログラムで中国残留孤児に教えた。勉強中はボランティアで残留孤児だけでなく中国語話者に日本語を教えた。

青短のタイ人留学生が、夏休みにシオン寮が閉寮している間にホームステイするのを引き受けて楽しかった。

B (S32卒): いまだに寝る前に必ず30~40分、英語を勉強している。夫が亡くなり子どもも独立し自分は何をしたら良いのかと考えた時、外国人の日本語教育の仕事を知って講座を受け、13年間、74歳まで日本語学校の先生を勤めた。60歳でインターンシッププログラムに応募して半年間イギリスで日本文化を紹介したことも。

静岡県立美術館のボランティア(ギャラリートーク)を50歳から10年間行い、55歳頃、静岡大学の社会人枠で日本美術史や西洋美術史を学んだ。

F (S32卒): 岐阜に住むようになってネイティブの英語を習う機会があり、英和時代に学んでいたことが懐かしくて、英語を学び返して15年間。外国旅行にも大いに役立った。また外国人に日本語を教える会にも参加した。

夫の会社の子会社がパソコンを売り始めたことから購入。60歳頃で女性が少なかったが岐阜市で研修を受け、市内のパソコン教室で10年間サポーターを勤めた。刈谷市に移転してからはボランティアでお年寄りや障がい者にパソコンを教えたりしている。夫が55歳になった頃に山のセミナーを受け友達と一緒に山登りを始めた。200山記念のホームページを自分で作って、今は旅行記になっている。短大時代に楽しんだ登山が基本になった。

G (S32卒): 住まいの近くに素晴らしい先生がいて、伝統工芸の人形作りを何十年かやっている(70歳ぐらいまで)。桐の粉をお米の糊で煉って形を作り胡粉で仕上げ、染め上げた和紙を貼る。日本工芸会の展覧会に出品(同会のWebサイトで確認したところ、「桐塑布紙貼」という技法で掲載されている)。

東海支部の活動として愛光園(重度身障児の通園施設)のボランティア活動に長く携わった。活動は終了したが、今でも新聞を送ってくる。ここを開設した自由学園出身、クリスチャンの皿井寿子さんの人柄に響くものがあった。(身障者に会って)初めの頃はショックだったが、目が開けたというか、意識が変わった。

H (S35卒): 社宅に住んでいた時、子ども向けに習字を教えにきていた先生から書道を学んだ。大人では自分ともうひとり。知多に住んで40年間、子ども向けに書道教室を開いた。多い時は120人ぐらい。週2日の書道教室の日以外は夫の単身赴任先に行き、そちらで手本を書いて、また戻って2日間は教室をという生活を10年くらい続け、名古屋市内に移転するまで教室は続けた。

婦人之友社の「友の会」⁵知多支部に14年間入っていて、家計簿の発表や、当番でお

菓子を作る(200個マドレーヌを焼いたことも)など。また東海支部の愛光園ボランティア活動で、車椅子用の座布団づくり担当を続けてきた。

I (S38卒): いちばん下の子どもが中学生になった時、ちょうど募集があり、日本語のセミナーに(1984・85年、Eと一緒に)。YWCAの依頼で、プライベートで2年間、その後日本語学校で60歳まで週に3回ぐらい、日本語を教えた。その後は名古屋市立大学で留学生に教えている。日本語のおかげでアメリカやアジアに多くの知人ができ、長い付き合いが続いている。ずっと英語を勉強していたので、夫の仕事でペンシルベニアに1年2ヶ月間住んで帰国してからはボランティア通訳もした。

音楽、オペラが好きで、名古屋は劇場が近いので演奏会にしょっちゅう行けるのが生きがいになっている。

C (S39卒): 短大で教職はとったが先生になる気はなかった。30歳(3人目の子が3歳)で全国組織の英語教育団体に入り、10~20人前後、自宅で週に2~3回子どもに教えた。多い時は40~50人で部屋を借りたことも。CDを使った手遊び、劇遊びなどで、自分の子どもにやらせたいと思ったので。30年間続けた。その後、地域でお年寄りの集まりの手伝いをしている。民生委員を1期務めた。

D (S39卒): 一緒に青短に進学しオラトリオソサエティに参加した友人姉妹とは、80歳を迎えた現在も、所属している静岡教会の聖歌隊と一緒に活動している。静岡教会には50年続いている目の不自由な方への朗読ボランティア(虹の会)があり、世話役をしている。教会がNHKの近くにあり、アナウンサーを講師に呼んで勉強した。現在は月に1回、SBS静岡放送局のOGのアナウンサーの指導を受けている。コロナのため奉仕は現在休会。「光の家」という施設で年2回、読書週間の時に読み聞かせ、交流の時を持っている。

J (S40卒): ウクレレを10年ほどやっている。学生時代、ギターをやっていたのでギターをと思ったが大きいので。

10. 人生にとって青短とは

聞き取りの最後の質問は「自分の人生にとって青短とは」である。「(学生時代に)青短はどんな場であったか」という質問の回答も含めて共通する内容ごとにまとめた。

自分の核・基礎:「何かあった時に青山の短大のことを思うと、いろいろなことが自分の心の中で納得できたり解決できる」A (S27卒)、「人生の基礎ができた」B (S32卒)、「自分をつくったところ。人生の核、中心になるもの」I (S38卒)。

信仰:「神様を信じるのが安心につながるかということを学んでいる」C (S39卒)、「教会に戻ったことで自分の人生がリセットされた。その基礎は英和、青山の教育」D (S39卒)。

人との出会い：「お礼拝、あの経験。人生からあの2年を抜いたら考えられない。いろんな方に出会えて」E (S28卒)、「良い先生に恵まれた」F (S32卒)、「友達の輪が広がり、物事を考える上でのベースができた」G (S32卒)、「高校の友達とは違って心から親しくなれ、日本各地の出身の友ができた」I (S38卒)、「友達に恵まれた。4人の友達とは卒業以来60年も交流が続いている」C (S39卒)、「良い先生と友達。たった2年なのに」D (S39卒)。

過ごした時間：「中高一貫の6年間に比べて短かった。もうちょっと学びたかった」F (S32卒)、「2年間は短かった」G (S32卒)、「楽しくて楽しくて、その一語だった」H (S35卒)、「すごく貴重な時間だった」C (S39卒)、「大切な時間だった」J (S40卒)。

やはり寮：「寮生活で生涯の友人を得た。楽しかった」F (S32卒)、「寮の生活は素晴らしかった」H (S35卒)。

誇り：「自分の時代は履歴書に青短英文卒と書くのが誇りだった」B (S32卒)、「ささやかな誇り。青山って胸張って言える」J (S40卒)。

そして感謝：「一番大事なところ。(自分を青短に導いた) 母親に感謝している」A (S27卒)、「両親に感謝、英和の先生に感謝」D (S39卒)。

おわりに

本プロジェクトの聞き取り調査は、1年目の2021年度、コロナ禍の影響で前期の予定が変更になって後期にずれ込み、筆者が担当した静岡市での調査からスタートした。その結果、聞き取りのおひとり目が短大の1期生、かつ短大の前身、青山学院女子高等部の出身という方になった。短大創設の歴史を体現するといえる方からこのプロジェクトが始まったことに、不思議な偶然を感じた。そのことを知った初めの軽い驚きが、聞き取りを進めるうちに大きくなっていったのを覚えている。

詳しくはおっしゃらなかったが、戦争中にキリスト教を基盤とする学校に学んだことで大変な経験をされている。それにも関わらず、むしろそれゆえか、進学に対する明確な意思をもち、卒業後も自分の生き方を貫いていらっしゃる。昭和20年代当時、これほど精神的にも経済的にも自立していた女性がいたということは想像を超えていた。

さらに90歳になろうという年齢で1年前まで三味線による奉仕活動を続けていらしたそうで、「今が一番幸せ」という言葉をごく当たり前のように口にされている。怪我で身体的には不自由をされているにも関わらず、年齢からくる制約といった社会通念や諦念とは無縁の軽やかさに、聞き取りを終える頃には驚きが感嘆に変わっていた。短大の歴史の1ページ目にこういう卒業生がいらっしゃるということを知り、卒業生の生き方を伝える本研究の意義をあらためて認識し、背筋が伸びる思いをした。

こういうスタートを切れたことに心から感謝し、第2期のプロジェクトにも取り組んでいる。結びがおひとりの具体例の披露となってしまったことをご容赦いただきたい。

- 1 『青山学院女子短期大学六十五年史 - 資料編』. 青山学院女子短期大学, 2018, p.847
- 2 小林瑞乃. 青山学院女子短期大学70周年記念ギャラリー展「青山学院における女子教育の歴史を振り返る」vol.2「青短の誕生と発展」パネル. 青山学院女子短期大学, 2019.
- 3 『青山学院女子短期大学六十五年史 - 通史編』. 青山学院女子短期大学, 2016, p.136-137.
- 4 同上 p.93-94.
- 5 「家庭生活を出発点として、社会に広く女性の力を及ぼして行こうと、家事会計、子どもの教育、健康、その他すべての家庭生活の充実向上を、協力して研究し、励ましあって実行を務める友の会」 引用元：“全国友の会について”. 全国友の会. <https://www.zentomo.jp/about/>, (参照2023-08-16).